

## 気象学会の大会運営について

—日本科学者会議気象研究所分会月例会の討論から—

### 三 寺 光 雄\*

日本科学者会議気象研究所分会は、本年1月16日月例会を開催し、気象学会の大会運営について討論を行った。本稿は当日の参加者の発言内容を圧縮して紹介するものである。

はじめに主催者側から本問題をとり上げた経緯について説明があった。昨年10月、秋季大会が大阪で開催された際、講演企画委員会からの「来春の大会から講演申込みと同時に予稿を出すことにする」という内容の文書が受付で配付された。この内容は大会第2日に理事あいさつの中で報告され、「会員の皆さんの中で大いに議論して、学会に意見をよせてほしい」との要望が述べられた。問題の所在を明瞭にするために、昨年9月8日の常任理事会および10月29日の全国理事会における本問題に関する議事録を再録しておく。

常任理事会の議事録は、「講演申込みについて」「講演企画委員会で検討した結果、次のような方法をとることにしたい。1. 予稿集の用紙を“天気”にとじ込む。2. 申込みと同時に予稿を提出できない研究発表は受け付けない。3. 期日（講演申込日）は従来通り。4. 申込件数は、原則として1人2件（スピーカーという意味）までをお願いしたい。5. 利点①大会運営がスムーズになる。②予稿紙郵送代が節約できる。③プログラム編集上役立つ。④労力が軽減される。上記の原案を検討の結果、全国理事会に報告して了解を得ると共に、秋の大会や“天気”を通じて周知を計り来年春の大会から実施する」というものである。

全国理事会議事録では、“大会運営について”の項で「朝倉担当理事から、春、秋大会の講演申込みについての検討結果を報告したところ、各理事からいろいろ建設的な意見が出た。なお、大阪で行われた秋季大会に出席された会員には講演申込みと同時に予稿集原稿を提出していただくことになった旨の内容をプリントとしてお知らせした。したがって、来年春の大会は、原案通り試験

的に実施することとし、分科会方式等について、更に十分検討を行うこととした」と記されている（アンダーラインは筆者による）。

この変更を知ったのは、秋の大会に出席した会員も含めて“天気”12月号が配付されてからであり、実際には、多くの会員にはほとんど伝わらなかったようである。

以上の経過報告の後、出席者から自由に発言してもらった。以下は発言内容を整理し、要約したものである。

A：学会における研究発表は自由であるのが原則だと思う。大会運営の面から発表数を制限せざるをえないというのは運営の面である。このことは研究発表の自由という点からみると大きな問題となる。したがって、当然、総会で承認を得る、あるいは、会員の意見を十分きいた上で運営するのが正しいと思う。

B：この変更案は理事会にはかっただけである。講演企画委員会では、大会は現状では3日間、3会場が限度であるという仮定のもとに、何らかの方法で講演数を減らさざるをえない、そのために申込みと同時に予稿を出すことにした。大会の日数、会場数について議論した上での結論でなければいけないと思う。

C：講演数が多いという理由で総会にはからずに数を制限するような方法をとるのは問題になると思う。現状では、制限せざるをえないとしても、大会に出席できない会員の意見もきく必要がある。今後もこの方法を続けるなら“天気”で大会運営についてのアンケートをとるなどのことを行ってほしい。

D：ここに、過去10年間の大会講演数と会場数、日程などを調べた資料がある（第1表）。かつて講演数が増えて3日間では消化できず、大会を4日にしたことがある。現在、ますます講演数が増えているにもかかわらず3日に縮少してしまった。この点の検討が不十分ではないか。

E：地方で大会を開く場合には、気象庁ではその地方の管区の研究発表会を同時に行う場合もあるから、管区研究発表会のスケジュールを考慮することも必要であ

\* 日本科学者会議気象研究所分会（51名の気象学会員で構成）代表幹事

第1表 最近10年間の大会講演数の推移

年次	春季大会					秋季大会				
	日数	会場数	講演数	1講演当りの時間(分)	開催地	日数	会場数	講演数	1講演当りの時間(分)	開催地
1966	3	2	89	20.9	東京	3	2	112	18.2	札幌
1967	3	2	138	17.2	仙台	3	3	108	23.3	柏
1968	3	2	144	15.0	東京	3	3	140	18.2	名古屋
1969	3	3	118	22.4	〃	3	3	136	19.9	福岡
1970	3	3	153	20.0	〃	3	3	163	18.8	京都
1971	3.5	3	161	21.1	〃	4	3	142	23.2	札幌
1972	4	3	175	20.1	柏	4	3	159	20.4	新潟
1973	3	3	143	21.4	東京	3	3	163	18.8	仙台
1974	3	3	163	15.5	〃	3	3	191	16.0	福岡
1975	3	3	192	15.9	〃	3	3	206	15.3	大阪

る。申込期日を早くすると、管区研究会を学会の研究発表会と同時にすることが困難になってくる。

F：大会運営の変更は総会にはかかるなど手続きの問題も大事だと思うが、どうしたら学会の研究発表会が会員の興味をもてるものになるか、という問題が大事である。私は申込みと同時に予稿を提出することはいいことだと思っている。たしかに、最後まで努力した最も新しい成果を発表することは、たえず心がけなければいけないが、現状では研究発表にたいして深い議論がなされていない。十分時間をかけて研究したものを発表することが望ましい。

G：研究発表の内容をよくすることはもちろん大事であるが、多少内容的に不完全であると思われる研究発表も保証されていることが必要であり、そういうなかで内容をよくする努力をしていく。原則としては、完成された研究を発表するというのは結構であるが、一方、研究発表の内容によって制限される可能性もある。気やすく発表できるという面があっていいのではないか。そのへんのかね合いがむずかしいと思う。

H：この問題は内容のある研究発表会にするために、講演時間を長くするというような自主的な討論の中からでてきたのであれば理解できるが、講演数を減らすためにとった措置である。研究発表の申込みが春季大会に間に合わず、発表時期を延ばすということになれば、講演数が制限されることにならない。また、予稿の提出が早くなったから内容がよくなるというものでもない。

I：講演数が多いか少ないかの判断は、講演企画委員会の処理能力によってきまることである。気象学会は会

員数も着実に増えたとし、講演数が増えても当然である。問題は大会運営などに気象庁職員の協力が必要であるという気象学会の特殊事情がある。しかし、現在、気象庁は合理化による業務繁忙のため学会活動に協力する余裕がなくなってきている。ここが一つの問題である。

J：講演数に関しては、今春の大会ではたまたま減るかもしれないが、秋の大会から元に戻るかもしれない。しかし、このような試みを行って、今までと変わったものがでてくるかもしれない。予稿集には、どのような方法で、どのようなことを問題にしたとか、どのような結論が得られているかなどが盛られていることが望ましい。

司会：大会運営について建設的な意見を出してほしい。

K：たとえば、具体的な例として、現在、シンポジウムにあてられている2時間をやめたならば、2時間で8講演は消化できるから3会場では24講演も増やせる。シンポジウムは大切だが、研究発表が制限されるくらいならば、シンポジウムをやめても講演数を増やすようにしてほしい。

L：学会は有志が集まって、会費を払い、学会を維持し、そして会員の研究発表会を開いている。このへんで初心にかえり、たとえば、大学で大会を開く場合など、人手が足りなければわれわれが順番に手伝うくらいのことがあってもいいのではないか。

M：具体的提案をしたい。大会は3日、3会場になっているが、東京の場合は、大会経費の問題は別として、協力できる人が地方にくらべて多いから4日にする。講演時間も長くして会期は3日に固定せず、すこしでも東

京での大会に吸収してはどうか。

N：他の学会では、分科会を設けて、そこで発表した講演は学会の研究発表として認めるようにしている。気象学会でも、たとえば、“山の気象シンポジウム”のようなものは分科会で行う方がむしろのぞましいという場合もある。このような方法を積極的に活用して研究発表を行うこともいいのではないか。

O：大会運営は現在のような方法のほかにも2年に1回くらい、分科会方式というか、研究内容の比較的近い領域の人が集まって、1題目30分くらいかけて分科会を開くことはできないか。雲物理と地球化学などは名古屋で、力学、大循環などは東京で、境界層、大気汚染は仙台で開くということも考えていい時期にきているのではないか。

P：理事会側では講演数が多いから減らす必要があるという。しかし、発表する側の会員としては講演数の多いのは結構ではないかと考える。したがって、会場数を

増やす、あるいは日数を増やすという考え方が望ましい。

Q：きょう“天気”を開いて、はじめて予稿用紙がとじ込まれているのを知った。はじめはプログラムを組むとき、かつて行われたように講演要旨（印刷はしない）をテーマと同時に出したら内容がわかってよいだろう、せめてこれを復活したらどうか、という話をきいたが、それをさらに進めて、テーマと予稿を同時に提出することになったようだ。一つの試みであると思う。

R：学会の研究発表会を興味あるものにするためには、大会を全国の会員の交流の場になるようにする。開催地の大会運営に協力する人たちと理事会側との懇談会なども開くようにしてほしいという地方側の意見もある。

以上は討論参加者のうちの18人の意見を要約したものであり、講演企画委員会、常任理事会での大会運営についての参考意見となれば幸いである。

## “大会運営について” 衆知を集めたい

### 講演企画委員会

建設的な意見を寄せて頂き、有難うございます。御希望通り今後の大会運営に大いに参考にさせていただきます。

講演申込みと予稿集の提出を同時にしたことは、今春季大会が初めてのことであり、講演企画委員会としては最大限の努力を致しましたが、必ずしも十分に会員に周知できなかったことは遺憾に思っております。

講演企画委員会では会合を持つたびに研究発表を活発にし、内容のある研究会にするためにはどうしたらよいか、何年間も討論を重ね研究して参りました。予稿集もその一環で、最初は反対意見も多く耳にはいりました。しかし、いまでは賛成意見が多いようで、文献に利用されるなど研究活動に役立っています。さらに研究会に役立つためには従来のように大会直前になって予稿集を読むのではなく、できれば1か月前に配布し、会員が十分時間をかけて読めることが必要です。今回からこれを実施し、建設的な討論ができるよう配慮したつもりです。

気象学会の運営は御指摘のように大学や気象庁職員の

無償サービスによって支えられている面が多いのです。講演企画委員会としてもその例外ではありませんし、条件は年々きびしくなっています。委員のサービスが限界に達したと判断される現状では、できるだけ能率をあげる方法をとらざるを得ません。その上にたつて、研究討論が活発になり、よいプログラムを編集し、大会をスムーズに運営するための一環として予稿集を講演申込みと同時に提出していただくことにしたわけで、会員にとっても、メリットが多いと思われます。また、地理学会やいくつかの学会ではすでに実施され、成果をあげているようです。

会員がふえ、研究活動が活発になれば従来の方法ではゆきづまるでしょう。新しい方式を生み出さねばなりません。シンポジウムを中止することは、研究発表の時間を確保するという点だけから見ると、一案でしょう。しかし各人の専門分野が細分化される傾向がみられる現在、大会シンポジウムの意義が以前にも増して大きくな